

「東京レインボープライド2017」は、2017年5月6日(土)にフェスタ、5月7日(日)にパレードを代々木公園イベント広場&野外ステージで開催いたします。

また、4月29日(土・祝)から5月7日(日)の期間は「TRPウィーク」として、各地で様々なイベントも開催される予定です。皆様の参加を心よりお待ちしております。

TOKYO RAINBOW PRIDE

第1特集

スーパーシャイニー
アンド
スーパーally

SUPER SHINY AND SUPER ALLY

必ずしも目立たなくても、確かな光を日本各地で放ちながら活躍しているLGBTQの人たち、マイノリティーがそのままで生きていく公正な社会とともに作っていく非LGBTQの人たち。

そんな人々を「SUPER SHINY & SUPER ALLY」として紹介します。

05 小野 春

45歳／バイセクシュアル
〈にじいろかぞく〉代表



LGBTのステップファミリーを生きる

小野さんは、5人家族。自身の連れ子の男の子が2人と、パートナーの連れ子の女の子。いわゆる「ステップファミリー」である。この「ステップ(step)」とは、「歩み・踏み段」などを表す英語だが、「血縁のない」「継(まま)」という意の接頭辞にもなり(例:継母=stepmother)、つまり、ステップファミリー(stepfamily)とは、配偶者的一方または両方が、前の結婚でもうけた子供を連れて暮らす家族のこと。アメリカでは、1970年代以降の離婚・再婚の増加とともに一般化した言葉で、最近、日本でも定着しつつあるという。

さて、そんなステップファミリーの小野さん一家だが、少々「普通」と違うのは、パートナーが女性、つまり同性カップルのそれだということだ。「LGBTのステップって、本当に大変なんです。ダブルで理解してもらえないですから」と語る小野さんとパートナーの関係に、日本では現状、法的な根拠はなく、傍目には、2人のシングルマザーが子供と一緒に、一つ屋根の下で共同生活をしているふうに見えてしまうのだ。

「5人で一緒に住むようになって、子供たちに2人の関係を正直に話すべきかどうかでパートナーと意見が分かれました。私は言わないほうがいいと主張したのですが、2年くらい平行線で。でも、暮らしが落ち着いた頃に内輪で結婚式することになり、その直前に、きちんと説明しました。それこそLGBTとは、みたいなところから。

当時、小学5年の長男の第一声は、「ママ、女同士は結婚できないんだよ」で……。日本はできないけど、できる国もあると教え、併せて法律に触れないことも伝えました。そのことをとても心配していたので。小学2年の次男、長女にはまだ、理解は難しかったようでした。

今では、高校3年の長男は、「ママたちのこと、応援してるよ」と言ってくれてるし、中学3年の長女は驚くほどオープンで、夏休みの自由研究でカナダの同性婚をテーマにしたり、パレードの時には、私が代表を務める〈にじいろかぞく〉が運営する親子ブースを手伝ってくれたり。次男はまだちょっと、難しいみたいなんですが……」

5人での暮らしが10年を超え、少しづつ物事が上手く回り始めていた矢先の今年の2月、小野さんに大きな試練が訪れる。乳がんが発覚したのだ。

「えっ、死ぬのか!? って。これまで“死”について考えてこなかったんで、本当にびっくりしました。まだ、死にたくない、と思ったし」

現在、抗がん剤治療をしており、この秋には乳房切除手術を受け、その後、再び抗がん剤治療が待っているという。

「乳がんの手術をするって言ったら、FtMトランスジェンダーの友人たちに羨ましがられて、度肝を抜かれたんです。もちろん、彼らも、がんは嫌なんでしょうが、合法的に親も納得して胸を取れるなら、乳がんになってしまって、みんな1度は妄想するみたいで。トランスの苦しみって、深いなって思いました。

健康って、当たり前じゃないんですね。今まで私は、なんて傲慢だったんだろうって。最近は、家族といふ時間を最優先にしています。家族最高!って礼讃する気持ちはないですが、複雑で面白いものだなって思います。子供たちから教えられることが多いです」

世田谷区に住む小野さんカップルは、同性パートナーシップ宣誓書の交付を受けている。入院や手術の保証人・キーパーソンには、パートナーになってもらっているという。

「今のところ特に問題にされたことはないですが、何かあった時のために、宣誓書を写真に撮って、スマホに保存しています」

国の法律ではないにせよ、同性のパートナーシップを公的に認める自治体が現れ、それが少しづつ広がっていることは、同性カップルにとって支えであり希望であり、未来へ向けての大きなステップだと言えるのではないか。



Haru Ono

1971年東京都生まれ。2010年〈にじいろかぞく〉設立。LGBT家族のためのネットワーク作りや情報提供を行っている。2014年から毎年、TRPパレード&フェスタの会場にて「おやこ休憩所」ブースを運営。

黙っていても、何も変わらない！

小学校を卒業後、離婚した母に連れられ、12歳でニューヨークへと渡る。英語とスペイン語が混じり合う、ラテン系の人たちが住むブロンクス地区。異国の中での、母と息子の2人暮らしが始まった。

「地元のジュニア・ハイスクールへ入学したのですが、最初の半年くらいは、言葉も分からなかつたし、授業にもついていけず、馴染めませんでした。でも、別にいじめられはしなかつたですね。物心が付いたときから、あの人かっこいいなって、男性のほうに視線が向いてました。思春期に入り、ゲイであることは搖るがなかつたのですが、当時のニューヨークでは暴力が怖かったし、友達とも馴染みたかったから、表向きは、ゲイじゃなって言つてました」

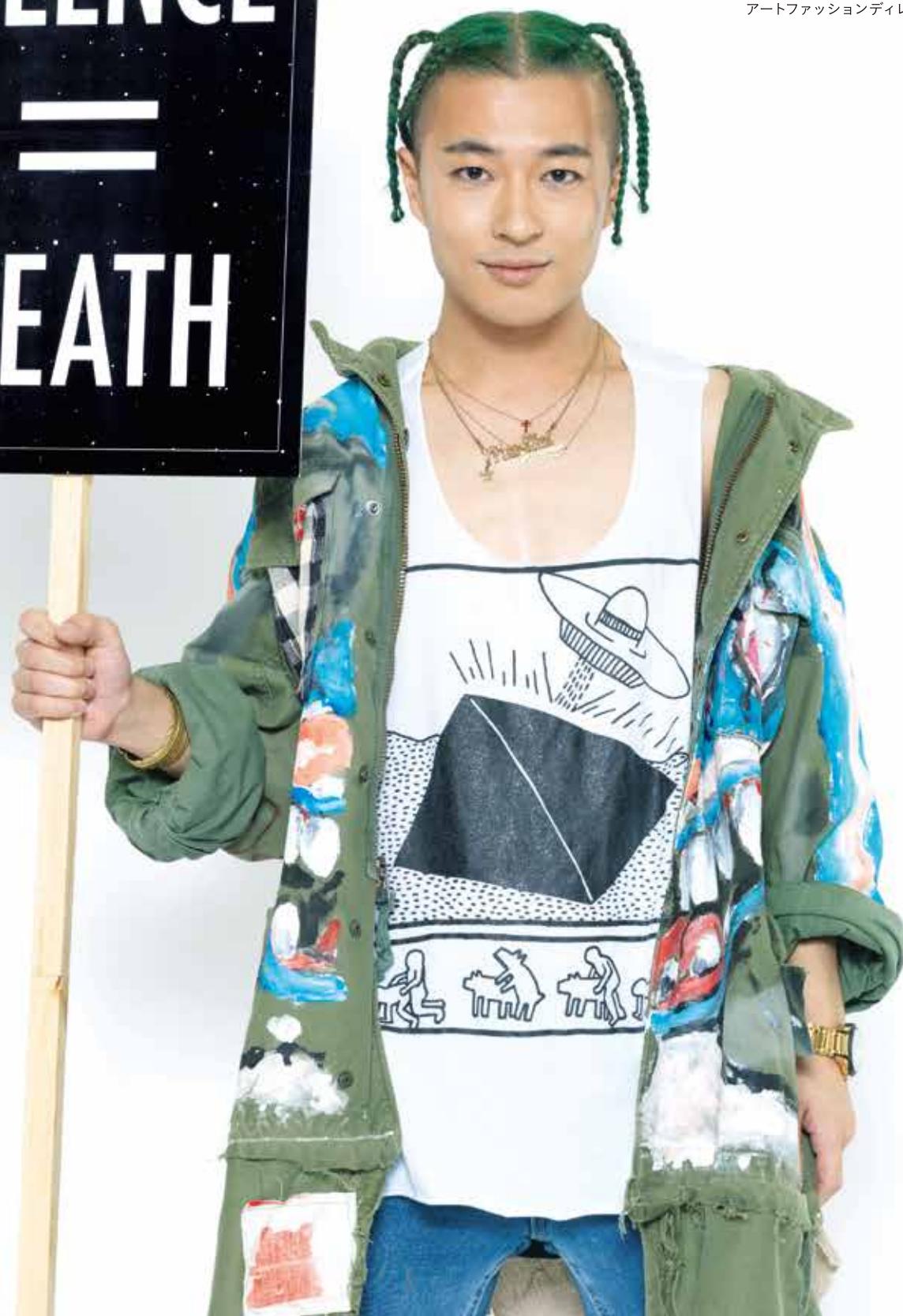
ニューヨークの公立高校に進学したが、大学進学に際し、高校3年生のときに帰国し、半年間、母親の実家のある大分県の高校に通う。けれども、日本の大学には進まず、大分に母を残し、単身ニューヨークへ戻ってコミュニティ・カレッジに入学する。

「高校を卒業したらゲイとして生きるんだ、とずっと思つたんです。だから、ニューヨークに戻つたらすぐに、1人でゲイクラブに行きました。その日に出会つた人とすごく仲良くなつて、そのとき、ようやくゲイとしてのソーシャルライフが始まつたんだ、と実感しました」

ゲイクラブに通つ始めると友達もでき、どんどんネットワークが広がっていく。アーティストやフォトグラファー、ファッショニエーの関係者の知り合いもでき、モデルやスタイリストもするようになる。彼氏もでき、大学は行かなくなつて中退してしまうが、26歳のときに大きなチャンスが訪れる。『セックス・アンド・ザ・シティ』の衣裳を担当したことでも有名なパトリシア・フィールドから声がかかり、彼女の下で働き始めるようになったのだ。

「まずはフロアで店員として働き、そのうち、パトリシアの指示でマネキンをスタイリングするようになつたんです。そうこうしていると、クリエイティブディレクターのような役職になつて、ファッションショーのスタイリングを一緒にしたり、アイデア出しやデザインにもコミットさせてもらえるようになったんです」

順風満帆。まさにシンデレラストーリーが現実のものになりつつあった矢先、日本から重大な知らせが届く。母親の臓に、がんが見つかったというのだ。



oo Hiraku

32歳／ゲイ
中村キース・ヘリング美術館
アートファッショニエー

「母は、僕の仕事をことを気遣つて、帰つてこなくていいと言つてくれて、当初はそのつもりだったんですが、がんの進行は思いのほか速く、ある日母の親友から容体が急変したという連絡を受け、2日で決断。どうせなら最期までそばにいてあげようと思つて、アパートを引き払い、仕事も辞め、帰国したんです」

回復することなく、残念ながら、お母さんは亡くなつてしまつた。再びニューヨークに戻る選択肢もあったが、一度、日本でチャレンジしたい気持ちが芽生え、住むことを決意。パトリシア・フィールドとつながりのあった中村キース・ヘリング美術館で働くことになる。日本で働き始めて約2年。彼の目に、今の日本の社会はどのように映るのだろう。

「日本人で男性でストレートの人が、日本の中で一番強い立場にいる人たちじゃないですか。アメリカでいうところの、白人で男性でストレートの人と同じで。彼らがまっすぐ歩ける道を、ゲイや女性、在日の人や外国人は、一緒にまっすぐ歩けないんですよ。やっぱり障害が厳然としてあるんです、マイノリティって。アメリカで今、なんなくそれに気づき始めていて、マイノリティがこんなに辛いんだから、知らなきやだめだって声が大きくなつている。でも日本で、まだそういう声が少ないなって思います。

例えば、僕はアメリカで男性と結婚していて、でも、日本では同性婚が認められていないから、彼は配偶者ビザで日本に滞在できない。一緒に暮らしたくても暮らせないわけです。それもあって、いずれはアメリカに戻ろうと思っています。ゲイとして生きていく上で、制度面を見ても、やはり暮らしやすいですから。でも、今はまだ若いので、日本の地でチャレンジしたい。LGBTを取り巻く環境が少しでも変わるよう、自分のできることをやりたい。そのために、声をあげていきたいと思っています。LGBT当事者が黙つておとなしくしていつても、何も変わらないですからね。社会全体もそうだと思うんですけど、沈黙してしまつたら、それは、個人としても社会としても、“死”につながっていくんじゃないでしょうか」

力強い言葉とともに、吸い込まれていくような、鋭い眼光が印象に残つた。

Hiraku

1984年東京都生まれ。2010年からパトリシア・フィールドの下で働き始め、その後クリエイティブディレクターに。2014年日本に帰国し、中村キース・ヘリング美術館のアートファッショニエー。

07 さつき

30歳/MtFトランスジェンダー
タレント、モデル、執筆家／〈乙女塾〉代表

**「できない」なんて言わないで、夢に挑戦しよう！**

「どうして自分のランドセルは、赤じゃないんだろう」。小学校に入学するとき、そう思ったことをはっきり覚えている。また、小学3年生の頃。体操着に着替えるときに、「他の男子の体が自分の体と同じで、すごくショックを受けて」と、さつきさん。まだ「性同一性障害」という言葉が余り知られていなかった時代のことである。

15歳のとき、TBSのドラマ『3年B組金八先生』第6シリーズ(2001~02年)で、上戸彩がMtFトランスジェンダーの中学生を演じて話題となった。それを見て、「私もこれなんだろうな」と自覚したという。折しもインターネットが普及し始めた頃で、そこで情報を得て、16歳からホルモン治療を始める。

「ホルモンを打ち始めると、だんだん体が女性化していく、なんとなく親も気づいたようで、男らしくしなさいって強く言われ、頻繁に衝突するようになったんです。それに耐えかねて、16歳のときに家出したんです。基本は誰にも頼らず、学費も生活費も自分で稼ぎ、大学も卒業しました。家族とは約8年、ほぼ音信不通状態でしたね」

本当に、孤独でした。“女の子になりたい”なんて、親にも先生にも言えなくて。唯一、幼馴染みのゲイの友達に相談したんですが、“男子が好きならゲイでよくない？ わざわざ女装する必要ないじゃん”って言われて。すごく悩んだ時期もあったんですが、やっぱり、彼は私とは違うな、私はゲイではないんだなって」

大学を卒業後、広告代理店でOLとして働くことになる。「履歴書に嘘は書けないので男性に丸をつけて、女性の姿で面接を受けたんです。戸籍の性別は男性？ 女性として扱ったほうがいいんですね？」と軽く聞かれました。諦めてはいたんですが、採用されたんです。ベンチャー企業で感覚が若く、仕事で成果を出せさえすればいいというスタンスで、ありがたい職場でした。就業中に、戸籍名を女性名に変えたのですが、このOLの経験は、“昼間の人”として認められたように思えて、人生観が変わりましたね」

3年間働き、25歳になったさつきさんは仕事を辞め、2013年3月にタイで性別適合手術を受ける。「麻酔から目覚めた瞬間、これからやっと、私の人生が始まるんだな」と思ったという。手術の2か月後に上京し、11月にはタイで開催されたニューハーフの世界大会「ミス・インターナショナル・クイーン」に出場（はるな愛が2009年に優勝）。第4位を獲得するが悔しくて、2015年に再度チャレンジ。優勝は逃したが、「ミスフォトジェニック賞」を受賞した。

2014年に、女装ニューハーフイベント「プロパガンダ」の創設者と出会い、「好きな服を着て、好きなメイクで、堂々と歩ける社会に！」を合言葉に、このイベントを主宰するようになる。2年間、アイコンとして突っ走ったが、様々な要因が重なって、2016年3月、「プロパガンダ」は惜しまれつつ終了する。

その後、6月からは、女の子に変身したい女装さん・性同一性障害の方のための「乙女塾」を開講し、新たな展開を模索している。

「メイクして写真を撮る10名限定の女性化レッスンです。女の子に変身する喜びを体験してもらいたくて始めました。これが思ったより需要があって、遠方から参加してくれる人もいて。いずれは、学校の授業の一環にしてもらうとか、また、乙女塾を通して、就職の難しいトランス女性の就職支援もしていきたいなと考えています」

最後に、将来の夢を聞いてみた。

「恋愛、仕事、結婚……。普通の女の子が当たり前に持つ夢を、トランス女子も普通に持てるような、そういう社会を目指していきたいですね。個人的には、東京オリンピック・パラリンピックでの聖火ランナー、お昼の民放番組でのレギュラー出演、歌やモデルなどのタレント活動……。いっぱいあるんですよ、夢。トランスジェンダーでもこんなに幸せに生きているんですよって姿を見てほしいんです。あとは、子供かな。すでに手術をしていて生殖能力はないわけで、そのこと自体、後悔はしていないんですけど、何らかの形で、もしチャンスがあれば、子供を育ててみたいですね」

振り返ってみると、夢って、運もあるかもしれないけど、諦めなければ叶うものなんだなって思うんです。“できない”なんて言わないで、これからも夢を追いかけていきたいし、みんなにも夢を追いかけてもらいたいですね」

Satsuki

1986年愛知県名古屋市生まれ。16歳からホルモン治療を始め、2013年に性別適合手術を受け性別を変更。2014年から2年間「プロパガンダ」主宰。2016年より〈乙女塾〉代表。